世界中の当たり前

喜界町立喜界中学校　三年　瀧元（たきもと）　楓（かえで）

私の生活は，いつも綺麗な水で溢れている。毎日おいしい水が飲め，水不足に一度も困ったことなんてない。その上，私の飲んでる水は，透き通っていて安全だ。これが，私にとっての当たり前だった。でも，他の国ではどうだろうか。

ある時，テレビで水の無い地域に住む十三歳の少女の一日の様子が映された番組を見た。

その少女の一日は，水汲みから始まる。毎日八時間という気が遠くなりそうなくらいの時間をかけて水を汲みに行っている。しかも，八時間という長い時間をかけているのに，手に入る水はたったの約五リットル未満の茶色い水だ。私だったら辛くて耐えられないだろう。少女は，周り一面砂漠の先の見えない道を歩き続け，ようやく水汲み場へたどり着いた。着くと少女は，茶色く汚れた水を大切そうにすくってそっと飲んだ。私は胸が痛くな

った。水を飲んだときの，あの嬉しそうな表情。今でも私の中に鮮明に残っている。あの少女のような人達にとって水は，自分の命をつないでくれる，命そのものであるということなのだろう。八時間もかけて汲むのだから当然学校には行けない。自分のしたことができないというのは，どれだけ辛いことだろうか。私達の生活では，想像できない位，過酷な生活をしていたということが目に見て分かった。

この他にも世界には綺麗な水を飲めない人達が二十一億人いるといわれている。つまり，四人に一人が綺麗な水を飲めないということだ。この数の多さに，私は驚いた。そう考えると私にとっての当たり前は，本当は当たり前ではなく，とても恵まれていることだったのだ。

当たり前が当たり前でなかった，ということに気付くまで私は，世界の水の問題の現状にしっかりと向き合ったことがなく，水の使い方について見直したこともあまりなかっ

た。水の問題について知らない私に必要なのは，まずは知ること。そこで私はインターネットで調べてみることにした。

一番最初に目についたのは，最近ニュースでもよく聞く「ＳＤＧｓ」という言葉だった。「ＳＤＧｓ」とは，持続可能な世界を築くための目標であり，水の問題に関しては，「だれもが安全な水とトイレを利用できるようにし，自分たちでずっと管理していけるようにしよう。」という具体的な目標が立てられていた。世界中の人々が水に困らず，安心・安全に暮らせる世界を築くために，この目標はみんなで協力し，早く達成すべきだと思う。目標達成のために私ができることは何か，考えてみることにした。

一つは，節水を心がけることだ。手を洗うときなど，さまざまな場面で水を使っているが，思い返してみると私はいつも水を出しっぱなしにしていた。これからの生活で私は，節水を心がけるなど，・・・ぱなしを減らしたい。

二つ目は，ユニセフ募金をすることだ。募金に協力することで，水道の設備を整えたりすることができるので，安全な水を飲むことができ，病気で苦しむ人を減らすことができる。また，水を確保しやすくなるので，子供達が学校に行けるようになる。私の学校でも毎年募金活動が行われているので，少しでも多くの命が救われることを願って，私も募金に積極的に協力していきたいと思う。

「私達の生活は当たり前ではない。」これをしっかり頭に入れていきたい。私が，おいしく水を飲んでいる間に，世界では水を求めて苦しんでいる人達が沢山いる。私一人ができることは限られているかもしれないが，一人でも多くの人を救える救世主になりたい。いつか世界中のみんなが水に困らず，笑って暮らせる世界になることを目指して，私はこれからも今も生活に感謝し，私にできることを精一杯頑張っていきたい。